

アルターパッティの一考察

宇 野 惇

インドの諸哲學學派の奉ずる知識論は、知識およびその根據あるいは手段であるブラマーナを主要な考究課題とする。ブラマーナの種類や性格に關しては、それぞれ學派の間で異論が見られる。

ここに紹介するアルターパッティ (arthapatti, 想定、要請) は、古い文獻では artha-prāpti なる語を以て論議道の一項目として示されているが、はたして獨立のブラマーナと認められていたか明確ではない。後にはニヤヤ・ストトラが隨所にこの語を擧げて、ブラマーナとしての獨立性を批判している。これの獨立性を積極的に容認し自説に採用したのは、おそらくミーマンサー學派が最初であろう。文獻ではシャバラの註釋に初めて見られ、以後アルターパッティに關する考察は、すべてこの註釋より出發している。^①したがつてクマーリラ（七世紀）、ブラバールカラ（七世紀）をそれぞれ祖とするパーッタ派とグル派は、ともにこれをブラマーナと認め、その獨立性を強く主張する。これ以外の學派でアルター

パッティを認めるのはヴェーダーンタ學派中の〔後期〕シャンカラ派のみであり、シャンカラの著作には見當らないが、おそらくバドマバーダ（八世紀）作のパンチャバーディカーがその嚆矢と考えられる。^②

アルターパッティ是因明入正理論疏上本等の中では義準（准）量と漢譯されているが、これは artha-ṇ āpatti に便宜的な逐語譯を當てただけで、傳統的な解釋を顧慮した適譯とは云いがたい。ここにとりあげる問題は次の三點に要約することができる。第一に、アルターパッティ（以下「想定」と和譯する）の獨立性を認める前記三分派の最大公約數的見解を示す意味において、Vedāntaparibhāṣā (VP) の所説をごく簡単に紹介する。第二に、その獨立性を認めず「想定」を推論の一形式と考える他學派の見解と、それに關連して、「想定」の獨立性を主張しうるための積極的な根據についてべる。第三に、「想定」を認める三分派の間に見られる相違點を示す。これらの中、第二、第三の問題はそれぞれの學

派が奉ずる存在論、ならびに知識論の他の諸問題と必然的な関連を有する事柄である。「想定」は單に「ブラマーナの問題に止まらず、推論や聖言量に關する難解な問題を内藏しており、詳細は他の機會にゆずるが、ここでは「想定」の考察がもたらす主要な問題點を擧げるとどめたい。

一

シャバラの定義によると「見られた事柄または聞かされた事柄が、もしそれがなければ理解（説明）できないとき、その事柄 artha を想定すること kalpanā である。たとえば、生きているデーヴァダッタが家に居ないのを見て（直接經驗して）、まだ見ていない『外出していること』を想定するがごときである。」「想定」の考察は以後すべてこの敘述に基づいて行なわれている。

VP. (十七世紀 Dharmarāja の作) の見解はシーマーンサー學派を殆んどそのまま踏襲している。「想定」とは所詮 (upa-pādya, 説明されるもの) を知ることによつて能詮 (upapādaka, 説明するもの) を想定すること (要請, apatti, kalpana) である。所詮を知ることが作具であり、能詮が果である。それ (A) がなければ理解 (説明) できないもの (B) が、それ (A) に對する所詮である。あるいは、それ (A) がなければ、あるもの (B) が理解できない (anupapatti, 不理解) と

き、それ (A) はそのもの (B) に對する能詮である。たとえば「晝間食事をしない者が肥えていること」(B) は「夜間食事をすること」(A) がなければ説明できないとき、「斯く斯く肥えていること」(B) が所詮であり、「夜食すること」(A) は能詮である。「夜食する」との想定が結果として得られる意識内容すなわち知識 pramiti であると考えられる場合、「ある事態 (＝ upapādaka) の想定 apatti」(artha + apatti) の合成語の關係は屬格の依主釋として理解される。これに對し、かかる「肥滿」の認識を「夜食すること」の作具と考える場合には「事態の想定を生ずるもの」という意味で、合成語的關係は有財釋として理解される。以上の理由で、「事態の想定」は知識内容 pramiti の意味にも、また作具 karaṇa, pramāṇa の意味にも適用される。

この「想定」には二種類がある。「見られたものに基づいた想定」dṛṣṭārthapatti と「聞かされたもの (情報) に基づいた想定」śrūtārthapatti とである。この中で前者の例をあげれば、人が「これは銀である」と眼前のもの (例、貝殻) を誤まつて理解するとき、また後になつて「これは銀ではない」と同じものが否定されることは、それが實在 (＝ 銀) である場合には理解できないことから、人は「銀」が實在以外のもの、つまり全く存在しないこと (mithyātva 虚妄) を想定する。後者の「想定」の例は、人から聞いた陳述が本來の

意味(第一義的な意味)と矛盾するとき、それとは別の意味が想定される。たとえば、「我を知る者は憂を超越する」(Cāṇa. VIII, 1, 3)という場合、聖典から教えられた「憂」なる語によつて直接的に表示される一群の繫縛が知識によつて滅することは、別の意味(究極的な立場から見れば存在しないこと)を想定せざるかぎり説明できないことから、この繫縛の虚妄なことが想定される。あるいは、「生きており、しかも家に居ない」との陳述を聞いた後で、「生きている者が家に居ないこと」が彼の「外出」を要請する。

つぎに、「聞かされたことに基づく想定」には次の二種類がある。

【1】 abhīdhanānupapatti (śrūtārthapatti) 陳述の一部を聞いて、結語關係(anuvaya)の表現が理解できないとき(例えば、主語、目的語、動詞の一つを缺くとき)、それに基づいて結語關係の理解に役立つ別の「語」が想定される。この場合を(結語關係の不理解 anupapatti に基づくもの)という。たとえば、「扉を」というとき、「閉じよ」なる「語」が補充される。また「ヴィシュヴァジャット祭を行うべし」というとき、「天界を願う者は」なる語が補充される。

【2】 abhīhitānupapatti (śrūtārthapatti) 陳述の示す意味が理解されないと知られるとき、別の事態(又は意味)が想定される場合を(意味の不理解に基づくもの)という。た

たとえば、「天界を願う者はジョーティシュトーマ祭を行うべし」というとき、「天界に至らしめる手段」がかかる刹那的な祭祀であることの不理解に基づいて、その中間に介在する新得力(アプールヴァ)なるはたらきが要請される。

二

「想定」を獨立のプラマーナと認めない他學派は、これを推論の一形式と見做す。ヴェーダーンタの見解に従えば、この「想定」は推論の中に含ませることはできない。正理・勝論學派のごとく、これを推論と見るかぎり、能詮がないところには所詮はないという先述の關係が如實に示すように、否定的補充關係 vyatireka-vyāpti に基づく推論に還元される筈であろう。しかしシャンカラ派によれば、否定的推論は拒否⁽³⁾される。かくして、他學派で云う否定的補充に基づく推論は、シャンカラ派によれば「想定」と見做される。たとえば、「地は他のものと異なる。香を有するから。」という一般的な否定的推論を「想定」と見做すためには、先述の「想定」の作具を何處に見出すことができるか。つまり、作具としての「所詮の認識」は、「香を有すること(＝因)はそれ以外のものとの相異であることがなければ説明できない」という認識である。これに基づいて「地の中に、それ以外のものとの相異(bheda = bhīnatva)を吾は想定する」との形をとつた

最終的な認識 *anuvyavasāya* が生ずる。

つぎに、正理・勝論學派では次のような見解をとる。「想定」が別のブラマーナであると吾々は認めない。なぜなら、否定的遍充關係の知識によつてそれは目的を達するからである。(Bhāṣapariśeda § 144) その自註はこれを次のように説明する。デーヴァダッタは百年も生きていると曆の上で教えられ、しかも生きている者が「家に居ない」と直接知覺されるとき、「百年も生きている者が家に居ないこと」は「外出している」のでなければ理解できない事柄である。だから、彼の「外出」が想定される。しかし、推論によつてその目的は達せられるから、このような見解は容認できない。すなわち、「生きていること」は「外出している」か「在宅している」かの何れか一方を意味することが理解されて、何れか一方を決定せんとするとき、「家に居る」との〔直接知覺に基づく〕事實が否定(阻害)されて「外出していること」が推論知として生ずる。同様に「肥えていること」は「晝間又は夜間に」食事すること」を含蓄することが理解されるとき、「晝間食事をしないこと」が〔經驗に徴して〕阻害され「夜間食事すること」が推論される。このように自註ムクタールヴァリーの見解では、推論を選言的三段論法と見てこの問題を解決せんとしている。

「想定」の獨立性を主張するミーマンサー學派の見解は

アルターパッティの考察(宇野)

次のとおりである。

第一に、兩ブラマーナの間には發生の様式に關して相違がある。推論の場合には *gamaka* から *ganya* へと進むけれども、「想定」の場合には反對に *ganya* (*upapādyā*) から *gamaka* (*upapādaka*) へと思考の順序が逆となる。さらに論理的に云えば、推論では確定的要素 *niścita-gamaka* から遍充關係に進むが、「想定」では未確定的要素 *samīgīdha-gamaka* に基づいて不理解を説明するものへと進む。

また第二に、「想定」を推論と考えるならば、そのリングすなわち因は何であるか。「家に居ないこと」或いは「生きていること」を單獨にリングとすることはできない。すでに死去した場合も考えられるから、前者のリングは必ずしも「外出」を推論せしめず、後者のリングは「家に居る」との推論知を生ずることもありうるからである。故に「生存」に限定された「不在」(生存+不在)がリングとなるが、これを構成する二つの要素は「外出していること」を豫想せずしては互いに結合することはできない。「外出」を前提とする以前では、二つの構成要素はリングとなることはできず、疑惑の形に止まる外はない。これをリングと認めない根據は、ミーマンサー學派の奉ずる似因の一つ「不成」*asiddha* とりわけ「無知による自體不成」*svatpājñānasiddha* に基づく。^④つまり正理・勝論學派等とちがつて、推論の因が遍充關係を

有するというだけでなく、所遍(＝因)が一體何を指すかという認識(すなわち vyāpātāvachchedaka の認識)が不可缺である^(a)と見做すことに由來する。

第三に、さらに一步をゆづつて、「想定」を定言的三段論法としての推論ではなく、混合選言的三段論法 Disjunctive-Categorical Syllogism と考へるならば(これは Bihati ya Sid-dhantamuktāvah § 114, Saṃkhyatattvakaumudī § 5 に見られる見解)、「想定」との關係はどのように見做されるか。この場合リングは問題とならないが、第一前提の「生きている者は、すべて家に居るか外出しているかの何れかである」なる命題は、その中に最終的な歸結 sādhyā である「外出している」との認識を自明のものとして既に含んでいるから、やはり先の問題と同じ誤謬をおかす結果になる。

第四に、推論を「想定」に還元できない理由として次のように説明される。山に煙を見て、「火がなければこの煙は説明できない」といつた不理解 anupapatti は「煙がない」かそれとも「煙と火との間に遍充關係がない」かの何れかによつて解決する筈である。しかし、二つとも否定できない事實であるから、先述の火が想定される。このように推論は「想定」によつて一應換置されうるかに見えるが、ミーマンサー學派によれば、所立に對する因の遍充關係は推論によつてのみ知られると考へられるから、結極、推論の獨立性を認め

ざるをえない結果となる。

三

つぎにパーッタ派とグル派との間に見られる見解の相違について一言すれば、(1)グル派は「想定」に際して疑惑の生ずることを不可缺な要素と見る。すなわち不理解をあくまで疑惑と考へ、これを満足させるものとして他の事態が要請されると見る。これに對し、パーッタ派では疑惑の生起を不可缺と見ず、不理解を矛盾撞着と考へてその解決者として他の事態を想定するとの見解をとる。(2)さらに顯著な相違點として、グル派は s'rutārthapatti を認めない。その見解によれば、陳述の意味は結語關係 anvaya の理解に在り、それは語によつて生ずるが、語の「意味」の不理解は他の「語」の想定によつて解決するのではなく、他の語の「意味」(又は指示内容)によつて初めて解決する。これに對してパーッタ派の見解によれば、「扉を」という陳述において結語的關係を完成させるためには、なるほど窮極的には「閉じよ」なる語の「意味」によつて補充されるはずであるが、その「意味」*artha* は最初必ず「語」に基づいて生ずるから、簡潔 *laghava* の故に「語」の想定を主張する。この「簡潔」か「冗漫」*gaṇṇava* かに關する見解の相違はミーマンサー學派が専門とする意味論に由來するものであり、さらに兩分派の間で名

高し anvitābhīdhāna-vāda (ナル派) と abhīhita-nvaya-vāda (バーッタ派) の論争にも發展する。

四

シャンカラ派の認める二種類の śrūtārthāpatiti は不理解を生ずるもの (= upapādyā) と想定されるもの (= upapāḍaka) は同質的であることを豫想している。したがって abhīdhānānapatiti は文法的構成の不完全さから「語」を想定し、abhīhītānapatiti は陳述の「意味」(又はその指示内容)の不完全から他の「意味」を想定するものであるから、實質的にはそれぞれバーッタ派とグル派の見解の折衷をはかつたものと見ることができる。日常經驗に徴して考えるならば、要請される事柄(= upapāḍaka) は「語」sabda の場合もあり、また「事實」artha の場合もありうるから、シャンカラ派の見解がより妥當なものであろう。しかし、ミーマーンサー兩分派の見解の相違は、聞き手に對して各語がいかにして陳述の意味を生ずるかという意味論的な sabda 論の相違に深く根ざしていることを考慮に容れねばならない。シャンカラ派においては、この「想定」は展現說 vivarta-vāda やマーヤーの説明に利用され、一方ミーマーンサー學派においてもヴェーダの陳述に見られる意味の補充 arthādhyaḥara やその他多方面に亘つて考究されている。

1 arthāpatiti api dīṣṭaḥ śrūto vā 'rtho' nyathā nōpapādyata ity artha-Kalpanā, yathā—jīvalo devadattasya gīhābhāva-darśanena bahir-bhāvasyādīṣṭasya parikalpanā. マーティンは二種のみを示したものと見て、前者(dīṣṭārthap)の dīṣṭa を五種に分ける。すなわち¹ pratyakṣa, anumāna, upamāna, arthāpatiti, abhāva による矛盾に基づく「想定」を考へ、全部を六種を考へる (Śv. VIII)。² ミーマーンサーは前記 dīṣṭaḥ śrūtaḥ を「³と考へて」śrūtārthāpatiti を認める。⁴

2 Ibid., Madras ed. pp. 73, 81.; Bhaṭṭi I, 1. 27, II, 2, 37.

3 VP. によれば推論は anvyāyin のみであつて (1) kevalānvayin も (2) anvaya-vyāhṛekin 否定される。(1)の理由としては梵はかななる屬性もためことに由來し、(2)の理由としては肯定的遍充でこと足りるときに否定的遍充を使用することは無駄であることに由來する。註釋 Śīkhamāṇi はこれに對して異つた見解をとる。所立と因との必然的關係が阻害されないかぎり、いかなる遍充(二種の)によるも推論は成立する。推論を認めないことが必ずしも「想定」の獨立性を否定することにはならず、⁵兩者は兩立しうる。ある對象の認識に對して、推論又は想定何れがプラマナなるかは、最終的な anuvyavasāya の形式がその相違を決定する根據となる。cf. Śīkhamāṇi ad VP. ed. by Kṛṣṇadāsa, Bombay 1928, pp. 179-182; D. M. Datta, Six Ways of Knowing, pp. 222-224.

4 Mānimeyodaya, Adyar ed. 1933, pp. 70-73.

5 Siddhāntamuktāvalī § 64.